

第2回 東京大学教養学部学生選抜コンサート

2007年11月10日（土）午後2時30分開演（開場2時）
駒場コミュニケーション・プラザ北館2階 音楽実習室

プログラム

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ

《パルティータ第1番》変ロ長調 BWV825 ピアノ独奏 伏木田稚子

フレデリク・ショパン

《幻想ポロネーズ》変イ長調 作品61

セルгей・ラフマニノフ

《楽興の時》作品16より第4曲 ホ短調 ピアノ独奏 清木美帆

フレデリク・ショパン

《バラード第2番》ヘ長調 作品38 ピアノ独奏 大澤悠子

Stevie Wonder *If It's a Magic*

Howard Dietz / Arthur Schwartz *You and the Night and the Music*
ジャズ・デュオ 美濃和駿・高山泰一

ロベルト・シューマン

《幻想曲》ハ長調 作品17 ピアノ独奏 世古隆蔵

フレデリク・ショパン

《バラード第4番》ヘ短調 作品52 ピアノ独奏 松原薫

入場無料（先着100名）

主催 東京大学大学院総合文化研究科・教養学部 ピアノ委員会

プログラム

ヨハン・ゼバスティアン・バッハ

《パルティータ第1番》変ロ長調 BWV825

パルティータは一種の組曲ですが、当時の他の組曲と比べ、各舞曲の性格に支配されず、より自由で多彩な性格をもち合わせた傑作であると評されています。7曲残っているうちの最初の6曲は、1726年に第1曲が完成されて以来、1731年までの間にライプツィヒで完成されたと言われており、その様式と内容の充実度から組曲形式のクラヴィーア作品の頂点をなすものとされています。

今回、私が演奏いたします第6曲は、前奏曲的な性格と幻想曲ふうな性質をもつトッカータで始まり、力強く展開するジグで締めくくられます。トッカータは、冒頭と終結部に感情の迸るアルペジオと内省的な2声の対位法の対比を、そして中間部に3声のフーガを擁する三部形式となっています。理屈はともかくとして、重々しく壮大なスケールの中で、繊細かつ穏やかに流れるフーガの響きを感じ取っていただければ幸いです。終曲のジグもまたフーガふうで、第2部が第1部の主題の転回旋律の模倣で始まります。ころころと鳴る音の粒と、心が浮き立つように弾むメロディーが、じゃれあいながら楽しそうに進む様をお伝えできればと思っております。

音楽の流れを「心」で素直に捉え、澄んだ響きで大好きなバッハの音色をお届けすること、そして、躍動的でありながら重厚感を兼ね備えたバッハの魅力を私なりに存分に表現すること、この2つを胸にピアノを奏でさせていただきます。みなさま、どうぞ伏木田流ブレンドのバッハをお楽しみください。
(伏木田稚子)

フレデリク・ショパン

《幻想ポロネーズ》変イ長調 作品61

1846年、ショパンが36歳のときに作曲された。このときショパンは肺病が悪化し、恋人ジョルジュ・サンドとの仲も決裂の一步手前にきていて、肉体・精神両面で苦痛に満ちていた。この作品はポロネーズの形式をとっているが、他のポロネーズとは異なり非常に瞑想的で、悲痛な物思いにふけているようであり、幻想曲風で、ショパン自身が「幻想」と名づけている。ショパンはこの作品を書き上げたのち、ほとんど作曲の筆を絶つに至った。

構成は、長い序奏、4つの主題とコーダから成っている。神秘的で不吉な響きを持った序奏はこれから始まる悲痛な音楽物語を予感させる。主題は興味深い形で展開、加工され、他のモチーフとも絡み合う。幻の中をさまようように次々に転調し、この作品最大の特徴である異様な和声が現れる。作中最も劇的なフィナーレは恐ろしい嵐のような反復進行の果てに、最終的には力と喜びにあふれ、主題が勝利を賛美するかたちで到来するが、それはまた狂喜のようにも感じられ、締めくくりは不気味な影を落とす。

セルゲイ・ラフマニノフ

《楽興の時》作品16より第4曲 ホ短調

1896 年に作曲された。翌 1897 年にラフマニノフは第 1 交響曲の初演の失敗から丸 2 年間以上作曲できないほど精神的痛手を蒙る。楽興の時は、このように区切られる初期のラフマニノフの最後を飾る充実した作品である。サロン的な小品とは違って、後の作品に見られるような円熟したピアノ書法が随所に現れている。

第 4 曲は中断することなく続く速いパッセージ、その周囲を叫ぶように活発にとびまわるリズムカルなフレーズ、といったラフマニノフの特徴がよく出ており、非常にロシア的でもある。地の底から湧き上がるような怒り、苦しみが力強く表現されていて、幻想ポロネーズとは対照的である。
(清木美帆)

フレデリク・ショパン

《バラード第 2 番》へ長調 作品 38（献呈：R.シューマンに）

バラード第 2 番は 1836 年から 39 年にかけて、すなわちショパンの生涯の中でもとりわけドラマに満ちている時期——マリア・ウオジンスカとの婚約とその解消、ジョルジュ・サンドとの接近とマジョルカでの生活、体調の悪化など——であると同時に、創作の面では前奏曲の多くやソナタ第 2 番、スケルツォの第 2 番・3 番などが次々と生み出されていた充実した時期に作曲された。

バラード（Ballade）とは中世イギリスの物語的な内容の舞踏歌（ballad）を起源として次第に洗練されていったもので、本来は詩の一種を指す。しばしば音楽がつけられて歌曲となっており、例えばシューベルトの作品がよく知られているが、器楽曲にバラードと名づけたのはショパンがはじめだといわれる。ポロネーズやマズルカと比べてポーランドの民俗音楽のリズムや旋法は目立った形で取り入れられているわけではないが、エキエル（ショパンの作品の校訂者としても知られるピアニスト）も「バラードはポーランド的特性をはっきりと持つ作品である」と述べているように、その表現方法自体の中に、抽象された民族性が宿っていると解される。

このバラードは、リトアニアの深い森にあるシテツ湖をめぐる神秘的な詩（ポーランドの詩人アダム・ミツキエヴィチによる）に触発されたものであると伝えられる。

構成はシンプル且つ大胆で、牧歌的な Andantino（「Andante（歩くように）よりやや速く」）と津波のような Presto con fuoco（「急速に、火をもって」）の対比の繰り返し、嵐のコーダ、そして最後に冒頭の主題（へ長調）がイ短調で回想される。

(大澤悠子)

Stevie Wonder *If It's a Magic*

R & B 界の重鎮、スティーヴィー・ワンダーが書いたバラード。1976 年にリリースしたアルバム "Songs in the Key of Life" に収録されている。

原曲はハーブのバックিংが印象的な遅めの 4 拍子だが、今回はワルツで演奏する。ベースによる即興的なイントロが、その後の展開を決定づける。

Howard Dietz / Arthur Schwartz *You and the Night and the Music*

作曲は、当時サイレント映画の伴奏ピアニストだったシュワルツによる。作詞家のディ

ーツはシュワルツと組んで”Dancing in the Dark”や”Alone Together”など、ジャズの名曲を手がけた。

朝が来て音楽が鳴り止んでしまってもあなたと一緒にいられるだろうか？と恐れる男の歌。よってこの曲のコンセプトは、演奏者の個人的経験と歌詞とのすり合わせの上「思春期男子の焦燥感」としたい。
(美濃和駿・高山泰一)

ロベルト・シューマン

《幻想曲》ハ長調 作品 17

このシューマンの《幻想曲》ハ長調 作品 17 は規模が大きく、雄大な内容を持つロマン派を代表する屈指の名曲である。この曲は、ベートーヴェンの没後 10 年にあたる、1837 年に記念碑をボンに建立するために必要な資金を集めるために作られた。ベートーヴェンを意識させるソナタ形式とロマン派特有の自由な音楽の展開が融合されており、シューマンの独創性、天才性がいかんなく発揮されている。また、楽譜の冒頭には詩人シュレーゲルの次のような詩を掲げている。

あらゆる音を通して
色とりどりの大地の夢の中
ひとつの静かな音が鳴り続け
耳をそばだてるものに響いてくる。

特に今日演奏する第 1 楽章は、全 3 楽章のなかでもっとも幻想的で情熱的である。左手の速い 16 分音符の上に音階的ながらも情熱に満ち溢れた旋律（ラララソファミミレレレレレミミファ）で始まり、この旋律が音楽を展開させていく重要な契機として様々な形で前半に多く用いられている。情熱的な最初の部分を経て p で奏でられる摩訶不思議なユニゾンの後に現れる旋律の美しさは言葉では言い表すことができないほどである。その旋律が突然休止し(こういったところはシューマンが後年患う分裂症などを予感させる。)全く種類の違う鋭角的なリズムの旋律があらわれるが、それもすぐに過ぎ去り、最初の旋律に戻ったかと思うと、急に音楽が混沌とし、そこから最初の旋律を用いたクライマックスに到達し、それが静寂し、**gmol** の中間部に入る。中間部についてはとにかく聞いて、その音楽を体全体で感じてもらいたいので、言葉による説明は割愛する。中間部が終わり、再現部に入り、最後はベートーヴェンの歌曲「遥かな愛人に」のフレーズが用いられ、静寂さが保たれたまま、消えるように終わる。

とにかくこの曲は、とても言葉では説明できないので、シューマンがこの曲に込めた思い、自分がこの曲に対して抱く感情を出来る限り演奏で表現したいと思う。

(世古隆蔵)

フレデリク・ショパン

《バラード第 4 番》へ短調 作品 52

この曲は、ショパンの創作が最も充実していた 1842 年から翌年にかけての作品である。当時 32 歳の彼は、夏から秋にかけては恋人ジョルジュ・サンドのノアンで創作にふけり、冬にパリに戻っては社交界で華やかな音楽活動をする生活を送っていた。ハイネ

やバルザックといった文人、画家のドラクロワなどと交流を深めたほか、多くの弟子を教え、リサイタルでも成功を収めていた。サンドとの関係もまだ破局を迎えてはいなかった。一方、親友や、初めて師事した音楽教師が相次いで亡くなったことは彼の精神に暗い影を落とし、それは晩年になっても癒されることはなかった。

彼のこのような「滅びの予感」を反映してか、以降の作品は瞑想的となり、対位法的な性格を強め、多様な和声が用いられるようになる。また、作品の規模は大きく、複雑な構成が見られるようになる。《バラード第4番》はこの傾向を代表する作品である。基調はソナタ形式であるが、自在に変容を遂げている。まず、ハ長調で序奏が美しく奏でられる。それに続いて、ヘ短調で憂鬱なワルツのような第1主題、それと対照的なしずけさに満ちた変ロ長調のコラール風の第2主題が現れる。展開部での変奏を経て、再現部では第1主題が2声のカノンの形に変奏される。ダイナミックな左手の動きと輝かしい右手の和音による第2主題の再現で、曲は最高潮を迎える。荘厳な和音の後の一瞬のしじまをはさんで、狂気に満ちたコーダで曲は幕を閉じる。

ショパンの4つのバラードは、ポーランドの愛国詩人、アダム・ミツキエヴィチの詩から発想を得ているとも言われている。演奏では、この作品を支配する物狂おしい情熱を引き出すよう努めたい。
(松原薫)

演奏者

伏木田稚子	文学部 行動文化学科 心理学専修
清木美帆	農学部 生物環境科学課程 地域環境工学専修
大澤悠子	文学部 思想文化学科 美学藝術学専修
美濃和駿	大学院農学生命科学研究科 生圏システム学専攻
高山泰一	大学院工学系研究科 航空宇宙工学専攻
世古隆蔵	文科Ⅰ類
松原薫	文科Ⅲ類